

## シンポジウム

# 古代末期からカロリング・ルネッサンスへ

——知の断絶か連続か——

司会 北海道大学 花井 一典

提題 〈Peregrinatio codicorum〉

筑波大学 野町 啓

提題 局地的断絶／長期的低落傾向  
からの回復

東北大学 清水 哲郎

(於 東京学芸大学 2002.11.10)

司 会

花 井 一 典

今回のシンポジウムの主題は標題からも明らかなように、古典古代の知的遺産が民族大移動の結果ゲルマン人の手に渡り、数世紀の曲折、変転を経た末にやがてカロリング時代に曲がりなりにも再生するに至るまでの、一般には文明の谷間と目されてきた時代の実像に迫ることにあつた。古代末期からカロリング・ルネッサンスまでのこの過渡的時代に古典的学芸・文化の連続的継承は果たして認められるのか？この問題は一面、中世思想研究のなかでも特殊専門的な関心を表現するかに見えるが、カロリング時代を彩る精神文化は来たるべきスコラ学の展開の素地ともなり、さらには現代に至るまでの（故中村元氏の「東洋人の思惟方法」と対比される意味での）西欧の思惟の基本骨格をなしてきたことからすれば、その成立過程への関心は中世研究者にはむろんのこと、広く（近現代も含めた）西洋研究者全般にまで早くから共有されていてもおかしくはなかつた。甚だ逆説めくが、この方面への標記の主題設定が斬新に見えること自体、従来の西洋研究の通弊でもあつた強度の近視眼的傾向（むろん自省を

込めて)を物語っているとも言えるであろう。

当日、如上の問題をめぐって提題者の野町啓、清水哲郎両氏から、未だ発掘途上の資料をもとに、先駆的というにふさわしく着実かつ刺激的な研究成果が報告された。

野町氏は主としてポエティウスの写本の伝承過程を検討し、カロリング・ルネッサンスへの新プラトン主義の短絡的な影響関係は斥けながら、写本伝承に関する Courcelle, Bischoff それぞれの仮説を援用しつつ、ウィアアリウム修道院におけるカッシオドールスの所蔵写本を原型とした写本の流布の線で西方世界への新プラトン主義伝播の可能性を示された。手堅さの見本のような手法であった。

また清水氏はこの谷間の時代のめぼしい伝存著作を拾い上げ、その内容の点検から、(さすがに暗黒時代という旧式の単純粗雑な見方は戒めながらも)知の長期的低落傾向の時代と総括し、カール大帝による積極的な外国人学者招聘策の推進もそこからの回生を図ったものと指摘された。氏によれば、その代表格ともいべきアルクインが宮廷文化に持ち込んだのは知的ディスカッションの空気であって、これが大帝治世下に三位一体論、聖像破壊をめぐる活発な神学論争の形で実を結び、上述の長期低落傾向からの脱却が可能となった。

以上の報告をめぐって、議場は(標題からする予想を裏切って)さまざまな見地からの質問が飛び交った。ここにすべてを要約紹介することはできないが幾つか挙げれば、当時の書物の性格が類推しにくく、写本の流布状況だけから学問文化の水準を測ることは危険では、との指摘が、また自由学芸のうちでも論理学の優位は何に由来するものか、という疑問が出された。他方では教会史、聖書解釈史的観点からも連続性の問題を考察する必要があると指摘され、さらに大局的見地からは、de Libera に代表される近年の研究動向をにらんで、ビザンツ、イスラム世界をも射程に入れた脱西欧的視点の必要性が示唆された。

このように、本シンポジウムは従来不問に付されがちであった領域を正面から取り上げただけに、一旦向かい合うと参加者各自の関心の所在に応じて様々な方向に議論が誘発される可能性を秘めており、短い時間内では議論を尽くすことなど到底おぼつかないのであるが、この方面に伏在する重要な問題点が幾つか浮上し、あらためて自覚されただけでも、提題者の労を多とすべきであろう。振り返ってみれば、奇しくも清水氏言うところの「知的ディスカッション」の場が彷彿される一幕ともなった。